

2018年度マンツーマン推進ディレクター会議

2018/12/15

マンツーマン推進プロジェクト

1. 2018全中の検証
2. アンケート結果
3. 3年間の検証
4. 今後の方向性

【検証】

- 1) 2017年12月マンツーマンディレクター会議にて中学世代には制限を緩和した。2018全中において男女共にゾンプレスと判断できるプレーがあった。
- 2) ボールを持っているプレーヤーにトラップを仕掛けること、ワンパスアウェイに対してインターセプトを狙う戦術が効果的であった。ツーパスアウェイがノーマークになるが、中学世代では技術、視野に乏しくトラップに対して長い距離を見ることが出来ず、そのチャンスを活かすことができないと効果的な戦術となる。
- 3) この戦術を用いる問題点は、
「オフボールディフェンスのビジョン、ポジショニングの習慣はマンツーマンディフェンスとは異なる」
「トラップに行くことはギャンブル性が高く、ディフェンスがボールに対してアタックすることばかりを習慣化させることは適切ではない」

【問題点】

- 1) オフボールディフェンスにおいて、ボールとマークマンの両方を捉える習慣がなくなる。
→ マークマンに注意を払わずボールに激しく行くことは、中学世代で特に通用するやり方。
→ 将来的なプレーヤーの習慣としては望ましくない。
- 2) マンツーマンの原則を超えたプレーもバスケットボールでは自由であるというものの、育成世代の目標として獲得すべきものを守るためにルールが作られていた。ルール基準を緩和したことによりコミッショナー判定基準が緩くなった。

【提言】

- 1) 中学世代は土台作りの時期であり、オンボール/オフボールのオフェンス/ディフェンスを高めるためにもマンツーマン以外のディフェンスは制限をしなければならない。
- 2) 中学世代のコミッショナーに対しては、予測に基づくプレーを認めつつもオフボールディフェンスのポジショニング、ビジョンの取り方について留意することを促す。

2. アンケート結果まとめ（プラス面）

【U12プラス面】

- ・コミッショナーにゲームを止める権限が付与されたことでやり得を容認しないスタンスとなった。
- ・1対1の攻防が多くなり、オフェンスディフェンス双方のレベルアップが図られている。
- ・ヘルプローテーション技術が徐々に身についてきている。
- ・指導者自身の意識改革が進んでいる
- ・オフボールの選手の動く意識が高まる。選手全体のプレーへの参加意識が高まる。
- ・ディフェンスにおいて選手の視野が広がる。
- ・ディフェンス能力の向上がオフェンス能力の向上に繋がっていることに気づく指導者が増えた。

【U15プラス面】

- ・選手個々のレベルアップ、ファンダメンタルの定着が進んでいる。
- ・1対1の能力アップに指導者の目が向いている。
- ・高身長者の1対1のオフェンス力やディフェンス力が向上してきている。
- ・戦術的にオンボール・オフボールスクリーンを多用し、バスケットボールの質的向上が見受けられた。
- ・ミニでのマンツーマン普及に伴い、マッチアップやヘルプの意識が向上した。
- ・選手に指導しやすくなっている。
- ・ゾーンアタックやゾーンの練習に時間をかける必要がなく、個人技術の練習に時間をかけることができる。
- ・マンツーマン指導のあり方、ジュニア期の選手育成のあり方について真摯に向き合い話し合う雰囲気ができる。
- ・オフボールの動きの重要性が各チームに浸透してきている。
- ・ディフェンスのヘルプローテーションの状況を読みながらプレーすることになり、判断力がつく。

2. アンケート結果まとめ（課題）

【オフェンス課題】

- ・未だに動きのないオフェンス、マッチアップエリアにいないオフェンスのマークマンをイリーガルと解釈していたりする指導者がいる。→指導者への教育
- ・オフボールの動きが悪く、適切なオフェンスができていないケースが多く見られる。→オフェンスの理解

【ディフェンス課題】

- ・連続トラップでボールマンに圧力をかけ続けてくるが、トラップが主眼となりマークマンへの意識が薄くなっているケースが何度かあった。→オフボールディフェンスのビジョン、ポジショニング
- ・ペイント付近のトラップについて、旗が挙がる・挙がらないがある。→コミッショナー
- ・ゾーンディフェンスが使えないため体格差によってオフェンスが成立する場面が増え、小さいチームのディフェンスが苦しくなっている。→育成世代の考え方

【戦術課題】

- ・リーガルなヘルプ、トラップの意識でさえ、イリーガルと解釈してしまい、チームディフェンス・オフェンスの考え方を学んだり発展させたりするチャンスを逸している場合が見られる。
- ・能力のないチームが戦術を工夫して勝利するといったバスケットボールの魅力の一つが削られている。
- ・積極的なゾーンディフェンス、ゾンプレスを駆使して戦う機会がなくなった。ゾンプレスの攻防の醍醐味を味わえない。→育成世代の考え方＝選手達に何を身につけさせるべきか、限られた時間で何を練習するべきか

【コミッショナー課題】

- ・コミッショナーはレフリー程地位や立場が浸透しておらず、旗をあげるのが難しく、負担である。
- ・地区の中心の方の考えで地区全体が方向付けされている。
- ・コミッショナーを務めるプレッシャーや負担が重すぎる。
- ・コミッショナーによってとらえ方が異なり基準の統一が難しい。
- ・一部指導者のコミッショナーに対する接し方がひどい。→テクニカルファウルの適用を検討中
- ・読みの良いディフェンスは罰しないという解釈はグレーゾーンが多すぎてコミッショナーの共通理解を図ることが難しい。→マンツーマンの前提が守られていればよいのだが・・

2. アンケート結果まとめ（課題）

【指導者課題】 →指導者の「フェアプレー精神」，「将来を見据えた指導」

- ・指導者の意識に温度差が顕著に見られ、プレイヤーズファーストに繋がっておらず、不平等さが現実問題として発生している。→指導者の育成世代に対する考え方
- ・指導者がルールの盲点を突くことばかりに気を取られる。→指導者のフェアプレー精神
- ・抗議ばかりして自チームの選手に目を向けていない。
- ・ゾーンディフェンスを指導することがなくなり、ミニや中学校の指導者がゾーンディフェンスの経験や知識が乏しくなることが不安。
- ・協会の方針と異なる指導をする指導者への対処。→指導者のフェアプレー精神に反する行動への対応
- ・地区大会ではコミッショナーがいらないため、マンツーマンでゲームに勝っているチームがあり不平不満が起きている。→指導者のフェアプレー精神
- ・育成することと勝つことの両立を選手にどう指導し、指導者の方々にどう伝達していくべきか。

【運営課題】

- ・大会運営に必要な人員不足、費用確保。→都道府県大会運営経費
- ・全員が共通理解をしてマンツーマンディフェンスを行う、コミッショナーとして管理することは容易ではない。
- ・地区のコミッショナーはルール変更への対応が大変。→講習会、大会実施時の代表者会議での申し合わせ
- ・コミッショナーが試合中に止めることはなかなか厳しいのが現実であり、審判がコールしてショットクロックを戻すなどの処置で始められないか？
- ・旗をあげることで試合の流れが一気に変わる時がある。
- ・大会にて出張扱いが難しい場合あり。

- 1) U12/U15共に、マンツーマン推進は浸透してきている。
- 2) マンツーマン推進によって、コート上で出現するプレーは変化してきており、プラス効果が見られる。
- 3) 育成世代で以下のような意識が指導者に生まれている。
 - 「マンツーマンがなぜ必要か」
 - 「ゾーンディフェンスはいつ学ぶべきか」
 - 「マンツーマンディフェンスをどのように指導するのか」
 - 「アイソレーションオフェンスはなぜよくないか」
 - 「勝利よりも優先して伝えるべき事項とは何か」
- 4) FIBAが求めた「世界に通じる選手を育成する」施策として「育成世代におけるマンツーマン推進」であったが、日本に定着しつつある方向。
- 5) 課題として
 - ① 指導者は「将来を見据えた指導」としてマンツーマンの理解を深め、指導していくこと
 - ② 指導者及びコミッショナーはマンツーマンとゾーンディフェンスの違いを理解すること
 - ③ コミッショナーはマンツーマン推進の目的を達成するために研鑽を積むこと
- 6) 現状の体制を継続すべきとの判断（コミッショナー設置人数などは検討）

1. 2018全中の検証
2. アンケート結果
3. 3年間の検証
4. 今後の方向性

- 1) フェアプレー精神を指導者/プレーヤーに浸透させる
- 2) マンツーマン推進事業を継続する
- 3) 指導者はマンツーマン推進事業の目的を再認識する
- 4) 指導者は基本技術の重要性の理解を深める
- 5) 指導者は育成世代で学ぶべきゲームモデルの理解を深める
- 6) コミッショナーは統一した見解を持つために情報共有を図り
研鑽を積む

■プレーヤー・指導者ともにフェアプレー精神を持つ

ルールの間隙を狙うのではなく、目的を理解し、プレーヤーにフェアプレー精神を伝えよう

- ルールを守る = 決めたことを守る
- 審判に従う = コミッショナーに従う
- 相手をリスペクトする = ルールの中で全力を尽くす相手を尊重する

「マンツーマンディフェンスを使って勝負をする」

■指導者はプレーヤーの将来を見据えた指導を行おう

- 強い「個」を作る必要があるので、指導者にマンツーマンを指導してもらう

「ゾーンをするのは育成世代の目標から外れている」

「育成世代の勝利/成功は、勝敗だけでなく、将来の成長スピードを高める土台を身につけることでもある」

■ なぜマンツーマン推進が必要となったのか？

- 世界に通じるトップ選手を作り出していくため
- そのためには個の強化が必要である
- 育成世代においてはまず個の強化の土台の構築が必要
- 勝利を得るためには組織的ディフェンスが効果的な年代
- 勝利よりも優先してやるべきことがあるのが育成年代

■ マンツーマンが必要である

- マンツーマンができないと選手としては成長スピードが遅れる
- ゾーンディフェンスはあるレベルを越えると通じにくくなる

■ 施策の今後

- 1) 育成世代の選手に求めるものは「個の力の獲得」であり、選手の将来を鑑み、選手の土台作りとしての要素を高めるためにも、この施策は継続して実施する方向である。
- 2) プレイヤーがどのような能力を高めなければならないかを考えると、ゲームモデルについての理解を深めることも必要である。どのようなオフェンスを行えばディフェンスを崩せるのか、ヘルプが強いタイプに対してどのようなアタックが有効か、ハーフコートトラップに対しての対抗策や、トラップを突破するための個人技術の理解などを深めることにより、現状より進んだスタンダードが得られるものと考えている。

■ 「なぜ？」

- 1) ゾーンを4Qのみ許可することの要望について、これを許可すれば練習において準備をすることが必要となり、基本技術を学ぶ時間が削られる事がマイナスと考える。よって現状認めない方向である。
- 2) 高校世代でゾーンに慣れていないためマイナスとなるとの指摘について、マンツーマンの土台があれば、高校においてゾーンアタックを習得することは比較的容易になると考えている。

■ プレーヤーに獲得させたい土台

- 1) オンボールオフENS : 1対1での突破力、判断能力の向上
- 2) オンボールディフェンス : 1対1で守る力
- 3) オフボールオフENS : スペーシング、動きのタイミング（合わせ）
- 4) オフボールディフェンス : ビジョン（ボールとマーク）、ポジショニング、予測力

※ オンボール：ボールを持っている状態
オフボール：ボールを持っていない状態

■ プレスブレイクの基本技術

- 1) トラップにおけるパスの仕方
- 2) バックドリブル&パス
- 3) トラップをスピードドリブルで突破する
- 4) ボールをスローインする
- 5) スペーシングとボールにミートして受けること

■ トラップにおけるパスにおけるティーチングポイント

- 1) 低さを保つ（肘を下げる）
- 2) ポジティブスタンスを意識
- 3) ワンハンドパスの利用（フェイクしてパス）
- 4) ラン&ジャンプに対してのバックドリブルの利用

■ プレスブレイクの教え方（ドリル）

- | | |
|-----------------------------|---------------------|
| 1) トラップにおけるパス2対3＝オープンになってパス | ドリル：3対3ウイングトラップ |
| 2) トラップにおけるパス2対3＝フルコート | ドリル：2対3エスケープ |
| 3) バックドリブル2対3＝フルコート | ドリル：2対3エスケープバリエーション |
| 4) スピードドリブル＝フルコート | ドリル：2対2+1 |
| 5) インバウンドボール | ドリル：3対3スクリーン&スリップ |
| 6) スペーシングとボールミート | ドリル：4対4トラップドリル |
| 7) プレスブレイク5対0 | |
| 8) プレスブレイク5対5 | |

■ ゲームモデルの段階

- 1) 1対1重視: 突破を図ることを狙う段階 (ペイントアタックの意識、突破技術を磨く)
 - ドライブ&キックが必要→スペーシングを指導
- 2) 1対1重視: パス&カットで人を動かし、ボールを動かすことで突破を図る段階
 - ディフェンスが強くなるので、動いてズレを生み出す
 - ボールをつなぐスポット、タイミングの指導
- 3) 1対1、2対2: パス&カットの中からオフボールスクリーンを利用する段階
 - スクリナーのセット技術の指導
 - スクリーンを使うユーザーの技術の指導
 - スクリーンを使う必要がなければスペーシングを取ることを考えた方がよい
- 4) 1対1、2対2、3対3: 相手のディフェンス力が高まり、自力で突破できない時に
オンボールスクリーンを使って突破を図る段階
 - オンボールスクリーン・ボールマンの技術
 - オンボールスクリーン・スクリナーの技術
 - オンボールスクリーン・ヘルプサイドのスペーシング及びプレー

■ 重要な視点

- 1) マッチアップしているか、マッチアップしようとしているか
(人=マンツー、場所=ゾーン)
 - オフェンスのスタート
 - カッティングについていくか
 - トラップの後
 - ペネトレーションに対するヘルプの後
- 2) オフボールディフェンスのポジショニング、ビジョン（ボールとマークマン）を取ろうとしているか

日本バスケットボール
未来構築のために

何卒皆様のご協力を
お願い申し上げます